

[論文]

## 地域子育て支援拠点での子育て支援に関する研究 —拠点利用前後における母親の子育て不安の変化に着目して—

浅井 拓久也

A Study on Child-rearing Support in Community Childcare Support Centers:  
Focusing on Changes of Child-rearing Anxieties of Mothers Before and After Use of the Centers

Takuya Asai

キーワード：地域子育て支援拠点、子育て支援、母親の子育て不安、多重コレスポネンデンス分析  
Key Words : community childcare support center, child-rearing support, child-rearing anxiety of mothers, multiple correspondence analysis

要約：本研究の目的は、拠点利用前後での母親の子育て不安を抽出し、その変化を明らかにすることであった。計量テキスト分析と多重コレスポネンデンス分析の結果、拠点利用前は子育ての悩みや不安を相談する場所がわからないという不安、子育てに対する不安やストレス、子どもの生活や遊びの不十分さ、外出する機会の不足を感じていたが、利用後はこうした不安や不足が緩和されたことが明らかとなった。

Abstract : This study aimed to identify some child-rearing anxieties of mothers and their changes before and after the use of community childcare support centers. As the result of quantitative text analysis and multiple correspondence analysis, it was shown that (1) mothers felt anxious about their child-rearing, (2) they had some uneasy feelings about a few fulfillments of child's life and play and a few chances of their going out, and (3) they did not know where to consult about the anxieties. However, these anxieties or stresses were mitigated after their uses of the centers.

## 1 研究背景と課題設定

本研究の目的は、地域子育て支援拠点（以下、拠点）の利用前後における母親の子育て不安とその変化を明らかにすることで、拠点での子育て支援のあり方や質向上に関する示唆を得ることである。

現代社会では、子育てに不安を感じる保護者が多い。厚生労働省が子育て中の約 600 名を対象に行った調査によると、子育てに負担や不安を感じていると回答した人が 72.4%であった（「とてもある」が 28.8%、「どちらかといえばある」が 43.6%）（厚生労働省 2015b）。岡本（2015）は、保護者の子育て不安が顕在化するようになってきた背景には、少子化や核家族化によって保護者自身が子育てに関わった経験が乏しいことや、地域社会とのつながりの希薄化によって子育てをする保護者同士の連携が弱まってきたことを指摘している。また、加藤（2010）は子育て不安等の子育てに関わるストレスは児童虐待につながりやすいことから、早期に予防的な子育て支援をすることによって子育て不安を緩和する必要性を指摘している。

こうした状況を背景に、保護者の子育て支援の必要性が高まっている。保育所保育では、2017 年に告示された『保育所保育指針』において、「保護者に対する支援」（2008 年告示、第 5 章）から「子育て支援」（第 4 章）へと表現が変更された。変更の背景について、同指針の審議の取りまとめでは、「核家族化、少子化の進行や都市化の進展などに伴い、家庭内あるいは地域社会において、育児についての見聞や経験が少なくなっているとともに、近隣に相談相手がなく孤立しているなどの状況があり、長時間労働の問題等ともあいまって育児に悩む保護者が増加している。家庭における子育ての負担や不安、孤立感を和らげ、男女がともに保護者としてしっかりと子どもと向き合い、喜びを感じながら子育てができるよう、子どもの育ちと子育てを支援していくことが重要である。こうした取組を通じて、全ての子どもの健やかな育ちを実現する必要がある」と、保護者の子育てに対して積極的な支援をしていく必要性が示されている（厚生労働省 2015a）。

保護者の子育て支援のためには、保育所や認定こども園による子育て支援だけでなく、地域による子育て支援の拡充が重要である。保育所等では専門的な知識や技術をもつ保育者が子育て支援を行うことから力強い子育て支援になるが、保育所等での人的物的な制限を鑑みれば、十分な子育て支援ができないことも多い。特に、地域の保護者の子育て支援に関しては多くの課題がある。一方で、国立社会保障・人口問題研究所の調査（2017）によると、地域による子育て支援を活用することで母親の就業継続が可能になり、子育てに関する経済的な不安の緩和につながっている。また、内閣府の調査（2014）でも、「子育てをする人にとって、地域の支えは重要だと思いますか」という質問に対して、地域による支援の重要性を示す回答結果となっている（「とても重要だと思う」が 57.1%、「やや重要だと思う」が 33.8%）。

地域による子育て支援の手段の 1 つとして期待されるのが、地域子育て支援拠点事業で

ある。同事業とは「乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業」であり、事業目的とは「地域において子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点の設置を推進することにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、子どもの健やかな育ちを支援すること」である（厚生労働省 2018）。具体的には、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」、「子育て等に関する相談、援助の実施」、「地域の子育て関連情報の提供」、「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施（月 1 回以上）」を基本事業として実施することで、子育てに対する保護者の不安を緩和することが期待されている（厚生労働省 2018）<sup>(1)</sup>。

しかし、こうした期待に対して拠点での子育て支援は応えることができているか（効果的であったかどうか）に関する研究は多くない。拠点での子育て支援の効果を検討する場合、実際に拠点を利用した側の評価や視点を調査することは欠かせないが、地域子育て支援拠点事業に関する先行研究を概観すると、拠点の運営や管理に従事する側を対象としたものが多く、利用した側の調査は少なかった<sup>(2)</sup>。また、利用者を（も）対象とした研究においても、調査方法と分析方法の観点から見ると、拠点利用前後の子育て不安に関する選択式の質問を中心とした調査や自由記述式の質問も含まれる調査であっても得られた回答をそのまま比較するにとどまるものであった（平田 2012、小野 2013a、小野 2013b、伊藤・川谷 2015、岡本 2015、今井・伊藤 2017、平田 2018、柴田・東原 2018、上田 2018）。

これらの先行研究には 2 つの課題がある。まず、選択式の質問はあらかじめ複数の質問と選択肢が用意されているため、回答者がそもそも意識や自覚していなかったことまで選択されるという限界がある。子育て不安のような心理的に負担がかかるような経験の場合、すべて選択されること（不安があった、不安を感じていた方向への回答）になり、調査結果と実際が乖離する可能性がある。しかし、自由記述式の質問では、回答者がそもそも意識や自覚していないことは記述として出現しにくい。また、回答するためには自分が感じている子育て不安とはどのようなものかを振り返る必要があるが、記述することは選択肢を選ぶよりも回答者の負担が大きいことから、回答者が必要性や重要性を感じていることが優先して記述されやすい。

次に、自由記述式の質問による調査であっても、得られた回答を羅列するだけであったり、分析者が気になる箇所だけを抽出したりするのでは、分析の客観性が担保できない。もちろん、完全に客観的な分析を行うことは現実的ではないが、どのような手続きでその回答を選び、どのような手順で分析したかを明確にすることは必要であろう。

そこで、本研究では、自由記述式の質問に対する回答を計量的に分析することで、拠点利用前後での保護者の子育て不安とその変化を明らかにする。特に、母親の子育て不安に着目し、拠点利用前にどのような不安があり、拠点利用後にその不安がどのように変化したのかを明らかにする。母親と子どもの心理的、身体的なつながりの強さや、母親が子育ての中心的な存在であり子育ての大半を担うことが多い現状から、母親の子育て不安の緩和や解消

が重要と考えられるからである。

## 2 研究方法

### (1) 調査概要

調査対象者は、同一県内にある拠点（子育て支援センター、つどいの広場等）から 13 箇所を選定し、これらを利用する母親とした。

調査方法は、自由記述式による質問紙調査とした。質問紙は、2019 年 2 月から 4 月末日までの間に拠点職員が母親へ配布し、即日回収した。

質問項目は、「地域子育て支援拠点を利用する前に子育てに関して不安に感じていたことがあれば、自由にお書きください。」と「地域子育て支援拠点を利用し始めてから子育てに関して変わったことがあれば、自由にお書きください。」とした。回収した回答は 131 件だった。

### (2) 分析方法

分析は以下の手順で行った。まず、分析に使用する回答を確認した。誤字脱字のような明らかな間違いは執筆者の判断で修正した。また、自由記述を文単位で分析するため、文末に句点がついていない記述や文末が感嘆符になっているものには句点をつけた。さらに、分析の都合上、「ママ友」や「ママともだち」を「ママ友」、「子供」や「こども」や「娘」を「子ども」、「お母さん」を「母親」等のように、同じ意味の言葉を統一した。回答中の拠点職員の名前は「職員」へ変更した。

次に、拠点利用前後の頻出 150 語（利用前は出現回数 5 回以上、利用後は出現回数 9 回以上）と特徴語（上位 10 語）を抽出し、さらに共起ネットワークを示した。これらの分析には、KH Coder 3 を使用した。特徴語を抽出する際は、分析の精度を上げるために茶釜によって複合語を検出し、検出結果を KWIC コンコーダンスで確認した。この結果、「ママ友」、「子育て支援センター」、「子育て支援」等のような複合語を強制抽出する対象とした。また、共起ネットワークでは、集計単位は文、出現数による語の取捨選択での最小出現数は 10、描画する共起関係は上位 40 とした。

最後に、回答をカテゴリ化し、多重コレスポネンス分析を行った。具体的には、得られた回答に対して階層的クラスター分析を行い、カテゴリ（拠点利用前の子育て不安と利用後の変化）を抽出した。分析には KH Coder 3 を使用した。集計単位は文、出現数による語の取捨選択では最小出現数を 10、クラスター数は Auto とした。続いて、SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いてカテゴリに即して回答を自動的に 2 値データ化した。以上を踏まえて、多重コレスポネンス分析を行った。分析には JMP 14 を用いた。

### (3) 倫理的配慮

調査対象者が質問紙に回答する前に、調査目的と調査概要、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、自由意志と無記名による回答であること、回答は途中で放棄することや提出を拒むことができること、質問紙は一定期間経過後に適切な方法で破棄すること等について、拠点職員から口頭で説明された。質問紙の提出をもって調査対象者の同意を得たとした。

### 3 結果と考察

#### (1) 頻出 150 語、特徴語、共起ネットワーク

拠点利用前後の頻出 150 語を整理したのが表 1、特徴語を整理したのが表 2、共起ネットワークが図 1 である。

表 1、表 2、図 1 から、拠点利用前後の子育て不安とその変化がわかる。まず、拠点利用前は子育てに不安やストレスを感じていたが、利用後は子育てを楽しく感じたり、子育てに余裕をもてたりするようになっていた。実際の回答（一部、以下同）では、利用前は「主人が夜勤で、どうしてもお昼は睡眠をとらなければいけないので、子どもにも静かにするように言いかせてきましたが、小さい子どもにとってはストレスもたまるしもちろん私もストレスがたまっていました。」「育児書か家族や親せきの子どもとの比較で不安が多い状態だった。」「子育てに不安と孤独を感じていた。家で 2 人の生活に息苦しさを感じていた。」とあった。

また、表 1、表 2 には拠点利用前の頻出語や特徴語として「初めて」とある。これは、初めて子育てをすることに對する不安やその地域で初めて生活する不安を表していた。実際の回答では、「親同士の仲間が少なかった。初めての子育てのためわからないことがたくさんあった。」「初めての子育てで不安なことが多く、ネットで見てさらに不安になったり、子どもの育ちもこれでいいのか、周りと比べてどうかと迷いながらだった。親と子だけでさみしい感じがした。」「引っ越してきたばかりで、初めての土地でしたのでこれからずっと 2 人っきりなのかなと不安でした。」とあった。

一方で、利用後の回答には、「利用前は自分 1 人で悩んだり、何かあるとインターネットで調べて対処したりしてたけど、この施設を利用してママ友の話をきいたり、職員の人に色々教えてもらえたりして心に余裕ができるようになって子育てが楽しんでできるようになりました。」「自分より大きい子の様子を見て、学んだり、実際にやってみたりする姿が見え、子ども同士で学びあうことができるって素敵だなと感じている。子どものもちあじをしっかりと生かして子育てできるようになり子育てがとても楽しいと感じている。」「気軽に子育ての疑問を相談することができ、改善されるので、とても感謝しています。」とあった。

次に、拠点利用前には自宅（「家」）にいることが多い、家族以外と話す機会がない等、孤独を感じていたが、拠点を利用することが外出する機会となったり、拠点を利用する他の母親や拠点職員と会話や相談することで孤独感を緩和したりしていたことがわかる。実際の

表 1 拠点利用前後の頻出 150 語

利用前		利用前		利用後		利用後	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	51	分かる	8	子ども	93	増える	15
子育て	28	育児	7	子育て	50	気持ち	13
思う	24	外	7	相談	29	行く	13
家	21	友だち	7	母親	27	出来る	13
不安	19	機会	8	思う	21	ママ友	12
親	14	交流	8	他	21	楽	12
感じる	13	相手	8	楽しい	20	交流	12
行く	13	他	8	遊ぶ	20	話	12
遊ぶ	13	遊び	8	利用	19	悩み	11
ストレス	11	孤独	5	自分	18	遊び	11
相談	10	子	5	人	18	たくさん	10
多い	9	初めて	5	友だち	18	一緒	10
利用	9			職員	17	外	9
自分	8			親	17	余裕	9
人	8			家	16	気軽	9

表 2 拠点利用前後の特徴語

利用前		利用後	
家	.119	子育て	.180
不安	.111	相談	.114
親	.089	母親	.101
ストレス	.082	他	.084
多い	.056	楽しい	.078
育児	.043	友だち	.071
相手	.037	職員	.069
機会	.036	自分	.067
孤独	.031	人	.067
初めて	.031	利用	.067

回答では、利用前は「核家庭で夫が単身赴任中のため、外出しなければ母子 2 人のみの生活で息苦しさを感ずることがあった。」「東京から引っ越してきて、友だちがいなくて孤独を感じていた。相談相手もいなかったため、子育てにストレスを感じていた。」「家で子どもと 2 人きりですごしていたので、家族以外との関わりがなく、ストレスがたまっていた。」とあった。

一方で、利用後は、「子育てに困った時、気軽に相談でき、小さな事でもいろいろ教えてくれる。子育てに関して、専門的なアドバイスももらえ、とても感謝している。」「他の母親と話す機会があることにより息ぬきになっている。」「家族以外の人とみんなで子育てできると感じるようになった。」とあった。

特に、拠点を利用することで、他の母親や拠点職員という相談相手のみならず、「友だち」や「ママ友」のような子育て仲間を得ていたことがわかる。実際の回答にも、「子どものことや悩みを気軽に話せるママ友ができた。子ども以上に自分が楽しいから行きたいと思って自分のために外出する。家にいる時間が減った。」「子育ての悩みを、相談したり、共感し



ていたが、ここに来る事でおもちゃや他の子どもとの触れ合いで刺激を受け、気持ちの安定や成長につながっていると感じる。」「家や友だちの家と違うおもちゃや場所で遊べるのでとても楽しそう。」とあった。

## (2) 多重コレスポンス分析

まず、拠点利用前後の回答に対して階層的クラスター分析を行った。分析結果として得られたデンドログラムを踏まえて、利用前後それぞれで5つのカテゴリを抽出した(表3、表4)。利用前後それぞれのデンドログラムからは6つのクラスターを得ることができたが、意味内容を考慮していずれも5つのカテゴリとした。

表3 階層的クラスター分析の結果を踏まえたカテゴリ (拠点利用前)

カテゴリ	含まれる語の例
子育てに不安やストレスを感じていた	不安、ストレス、悩み
話をしたり悩みを相談する相手がいなかった	孤独、相談、悩み
子どもの生活や遊びが充実していなかった	遊び、おもちゃ、子ども同士
自宅にすることが多く外出する機会がなかった	自宅、ワンオペ、息苦しい
子育ての悩みや不安を相談する場所がわからなかった	場所、行く、地域

表4 階層的クラスター分析の結果を踏まえたカテゴリ (拠点利用後)

カテゴリ	含まれる語の例
ママ友ができる	ママ友、出来る、増える
他の母親や職員と交流ができる	母親、職員、交流
子育てに関する相談や情報収集ができる	子育て、相談、情報
子どもの生活や遊びが充実する	子ども同士、成長、遊ぶ
拠点を利用することが外出するきっかけになる	外、機会、行く

次に、SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いて、表3と表4で示した5つのカテゴリに即して回答を自動的に2値データ化し(1=該当する、0=該当しない)、多重コレスポンス分析を行った(図2)。

分析結果として、第1次元と第2次元を合わせるとデータ表の情報の87.2%を説明できることがわかった。また、次元1と次元2の解釈は難しいが、カテゴリ項目の距離の近さに着目すると、3つの特徴的な傾向が読み取れた。第1に拠点利用前は「子どもの生活や遊びが充実していなかった」、「話をしたり悩みを相談する相手がいなかった」が、利用後は「子どもの生活や遊びが充実する」、「子育てに関する相談や情報収集ができる」こと、第2に利用前は「子育てに不安やストレスを感じていた」が、利用後は「ママ友ができる」、「他の母親や職員と交流ができる」こと、第3に利用前は「自宅にすることが多く外出する機会がなかった」が、利用後は「拠点を利用することが外出するきっかけになる」ことである。



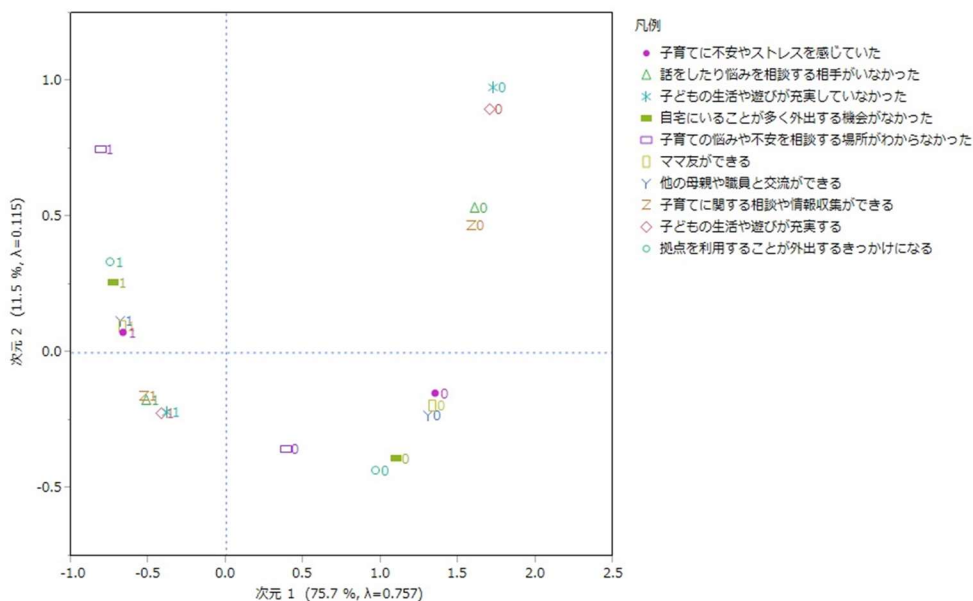


図2 拠点利用前後における子育て不安の変化に関する散布図

### (3) 考察

以上の分析結果を4つに整理し、考察を行う。まず、拠点利用後には、子どもの生活や遊びに対する不安が緩和されたことがわかった。現代社会では兄弟姉妹がいない子どもが多く、自宅での遊びには制限や限界も多くあるが、拠点には多くの子どもが集うことから、集団生活を通して社会性や協調性を育んだり、一人ではできない集団的な遊びを経験したりすることができる。表1と表2で示した実際の回答にも、拠点利用後に、よく遊ぶようになった、他の子どもとの関わりが見られた、同年代の子どもと遊ぶ経験ができたといった。特に、拠点には自宅にはない多数、多様のおもちゃがあることから、子どもの遊びや遊び方を充実するきっかけとなっているのであろう。多数の子どもと関わるというような自宅では見られない子どもの姿を見ることで、子どもの成長を感じ、不安が緩和するのではないだろうか。

次に、拠点利用前に母親が感じていた子育てに対する不安やストレスは、利用後にママ友ができたり、他の母親や職員と交流したりすることで緩和されていた。拠点利用後に母親の子育て不安が緩和するという結果は、多くの先行研究の成果と一致するものである。しかし、自由記述の回答としてママ友と他の母親や職員という違いが生じたことは注目に値する。これらはいずれも子育て仲間であるが、親近性という観点から見ると異なる。ママ友とは友達という意味であるが、他の母親や職員とは必ずしも友達を意味しておらず、前者は自分と他者の親近性が強いカテゴリだが、後者はそうではない。こうした言葉の違いが生じた背景

を考察することは本研究の分析だけでは難しいが、拠点に対する必要性や子育て不安の高低という回答者の心理的、環境的な要因が影響していると思われる。これらの要因とカテゴリの関係を検討することで、利用者それぞれの状況に応じたより効果的な子育て支援につながるであろう。

さらに、拠点利用前は自宅にすることが多く外出する機会がなかったが、拠点を利用することが外出するきっかけになっていた。拠点は気軽に利用できる、敷居の低い子育て支援施設である。こうした気軽さや敷居の低さが、子育て不安を感じている母親にとっては重要である。岡本(2015)は「かつての井戸端会議の場や公園での交流の風景が衰えている現在の地域社会において、拠点は日常の愚痴や悩みを安心して話せる場であり、同時に必要な情報を得られる場であることが求められる」というように、井戸端会議や公園を例として拠点の気軽さや敷居の低さを指摘している。

拠点が気軽に利用できる、敷居の低い場所であるためには、利用者の自宅と拠点の距離的な近さが重要である。距離的な近さを実現するために、拠点は出張ひろばを実施することができる(厚生労働省 2018)。徒歩圏内に拠点が存在せず、交通の便や移動手段に課題を抱える地域では出張ひろばは重要な役割を担うであろう。こうした地域に住む親子の子育ては孤立や隔離に陥りやすく、拠点での子育て支援に対する必要性が高いことが多いからである。これまでの先行研究や実践報告の対象は常設の拠点での子育て支援が中心となっていたことから、出張ひろばでの子育て支援のあり方や運営方法について検討が必要になるのではないだろうか。

最後に、拠点利用前には子育ての悩みや不安を相談する場所がわからないという子育て不安があることがわかった。これは、拠点利用前には拠点という存在が意識されていなかった可能性を示唆しているからである。保育所や幼稚園と比べると、子育てする母親に拠点の存在やそこでの子育て支援が十分に認知されているとは言い難い。初めての子育てやその地域で初めて生活するという状況なら、なおのことである。

こうした事情を鑑みると、「子育ての悩みや不安を相談する場所がわからなかった」と回答した母親が、なぜ拠点を利用するに至ったかというきっかけや分岐点を明らかにする調査や分析が必要になるであろう。上田(2018)は、調査対象者5名に対して、個人の経験を可視化しやすい複線径路・等至性モデル分析によって産後から拠点に来るまでの選択について示している。上田の研究は調査対象者の選定に課題があるが、重要な示唆を提示している。当初は子育て不安を相談する場所がわからなかったが実際は拠点を利用できた母親以上に、わからないままになっている母親の子育て不安の方が深刻化する可能性が高い。子育て不安を感じる母親が拠点に参加するまでのプロセスを明らかにすることで、こうした母親を救済する方法を模索する必要があるであろう。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究の目的は、拠点利用前後での母親の子育て不安の変化、具体的には拠点利用前にもどのような不安があり、拠点利用後にその不安がどのように変化したのかを明らかにすることであった。計量テキスト分析と多重コレスポネンシ分析の結果、拠点利用前は子育ての悩みや不安を相談する場所がわからないという不安、子育てに対する不安やストレス、子どもの生活や遊びの不十分さ、外出する機会の不足を感じていたが、利用後はこうした不安や不足が緩和されたことがわかった。

本研究の結果を踏まえて、拠点のあり方について検討したい。地域による子育て支援の1つとして拠点が担う役割や機能が増すほどに、拠点が気軽に利用できる、敷居の低い場所であるということが重要になる。別の言い方をすれば、拠点の重要性が増すほど、拠点からの離脱の自由（利用をやめる自由）が侵害されやすくなるということである。

具体的には2つの可能性があろう。可能性の1つは、子育て不安を緩和するために拠点を利用していたが、拠点（拠点職員）による心理的、物理的な支援なくしては主体的に、自律的に子育てができなくなってしまうことである。もちろん、拠点の役割は保護者の子育て不安を緩和することや子育て支援をすることである。しかし、拠点の子育て支援が子育ての中心になると、子育てに対する保護者の主体性や自律性が希薄化し（時に喪失し）、子育ての責任の主体が不明確になってしまうことがある。『保育所保育指針』では、子育ての原則について「保護者に対する子育て支援を行う際には、各地域や家庭の実態等を踏まえるとともに、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者の自己決定を尊重すること」と示されている（厚生労働省 2017a）。子育てにおいて、拠点が担う役割が中心になることは、保護者の自己決定を希薄化させ、子育てに対する責任や意欲を育む機会を失うことになりかねない。

現実的には、子育てに課題を抱える保護者も多くいること、あるいは母親が子育ての中心となり、過度な負担を負っていることからすれば、子育てに対する責任論や自己決定論を安易に主張することには慎重であるべきである。しかし、拠点職員の要件は「子育て親子の支援に関して意欲のある者であって、子育ての知識と経験を有する者」とあり、子育て支援に関する高度な専門性を有するというより、地域の子育て支援をしたいという強い意欲や善意をもった者であることが多い<sup>(3)</sup>。こうした強い意欲や善意があるからこそ、拠点職員は保護者の子育てに介入しやすく、一方で子育て不安を感じている保護者は介入されやすくなる。だからこそ、子育てに関する保護者との関係において、拠点は何ができるのか（できないのか）、何をしてよいのか（してはいけないのか）を十分に検討する必要がある。

もう1つの可能性は、拠点利用者の同質性や、子育て仲間の仲間意識や帰属意識が強まることで、拠点の新規利用者や拠点での緩やかな紐帯を求める保護者の排除につながることである。子育て不安を感じる母親にとっては、子育て支援の専門家だけではなく、時にはそれ以上に、ママ友のような子育て仲間の存在は重要である。子育て不安を抱える母親にとっては、ママ友は「自分と同じ立場の人」、「自分の気持ちがわかる人」という同質性を有して

いるからである。それゆえに、拠点でのママ友や子育て仲間は集団を形成しやすく、集団内での仲間意識や帰属意識をもちやすくなる。

しかし、こうした意識の高まりには消極的な面もある。拠点は気軽に利用できる、敷居の低い場所であることが目指されるが、当該の拠点の利用者間で強い集団が形成されている場合、新規利用者は利用しづらさを感じやすくなる。また、子育て仲間としての仲間意識や帰属意識が強いほど仲間集団への帰属性が求められやすいが、拠点を一時預かりや子育ての息抜きとして時々利用するだけの母親にとっては、ママ友を作ったり他の母親や職員と交流したりすることが心理的な負担に感じることもあるだろう。拠点で開催されるイベント等に参加しない（できない）母親は集団から排除されやすくなるのである。同じ拠点を利用しているということは、利用者は同じ地域の住民であることが予想され、それゆえに拠点の利用に負担を感じたら、ただちに利用を中止すればよいという単純な問題ではない。岡村（2016）は、「同じ場所、同じ仲間と定期的に時間をともにするなかで、講師や友人たちと関係が深まっていき、講座での体験や子どもの成長や育児への思いを分かちあうことができるため、グループ内の関係が良好であれば、つながりを作りやすい」というように、仲間集団の関係性に留保を付けつつ拠点の効果を指摘している。

現代社会においては、保護者を取り巻く子育て環境や背景は多様である。地域とは、一枚岩ではなく、こうした多様な背景をもつ保護者の総合である。拠点において保護者の多様性を踏まえた子育て支援をするためにも、拠点は気軽に利用できる、気軽に利用をやめることができる（できるようになる）場所であり続けることが重要になるであろう。

今後の課題として、拠点での子育て支援を利用したくてもできない母親に対して、どのようなアプローチが可能かについて検討する必要がある。また、今後も拠点の重要性が増していくからこそ、子育てという私的な側面もある営為に対して、拠点がどこまで予防的に関わることが妥当かについても検討すべきであろう。

## 注

- (1) 同事業が開始された 2007 年の実施箇所は 4,409 箇所であったが、2017 年の実施箇所は 7,259 箇所というように毎年増加し続けている（一般型は 6,441 箇所、連携型は 818 箇所）（厚生労働省 2017b）。なお、地域子育て支援拠点事業の類型は、2007 年はひろば型、センター型、児童館型、2013 年は一般型、地域機能強化型、連携型、2014 年以降は一般型、連携型となっている。
- (2) 拠点従事者と拠点利用者別の先行研究の整理は、浅井（2018）にて行った。
- (3) 子育て支援の専門性を高めるために、子育て支援員基本研修と、子育て支援員専門研修における地域子育て支援コース（地域子育て支援拠点事業）を修了していることが望ましいとされている（厚生労働省 2018）。

## 引用文献

- 浅井拓久也 (2018) 地域子育て支援拠点の子育て支援に対する利用者満足度に影響を及ぼす要因. 秋草学園短期大学紀要, (35). 1-13
- 今井昭仁・伊藤篤 (2017) 神戸市の大学等が運営する地域子育て支援拠点事業の利用状況と展望. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10 (2). 135-140
- 伊藤篤・川谷和子 (2015) 地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義—0歳児のパパママセミナー受講者の自由記述を手がかりとして. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7 (2). 125-131
- 平田美智子 (2012) 子育てサークルと育児期のストレス—地域子育て支援拠点でのインタビューから. 和泉短期大学研究紀要, (32). 29-36
- 平田美智子 (2018) 地域子育て支援拠点における利用者支援事業—関東地域の地域子育て支援拠点へのアンケート調査から. 和泉短期大学研究紀要, (38). 11-18
- 加藤曜子 (2010) 虐待予防における地域子育て支援の意義と目的. 社会福祉法人全国社会福祉協議会 (編). 市区町村社協における虐待予防のための地域子育て支援の展開. 3-9
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 第15回出生動向基本調査 (独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書.
- 厚生労働省 (2015a) 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ.
- 厚生労働省 (2015b) 人口減少社会に関する意識調査.
- 厚生労働省 (2017a) 保育所保育指針.
- 厚生労働省 (2017b) 地域子育て支援拠点事業実施状況 (平成29年度実施状況).
- 厚生労働省 (2018) 地域子育て支援拠点事業の実施について.
- 内閣府 (2014) 家族と地域における子育てに関する意識調査報告書.
- 岡本聡子 (2015) 母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果—利用者アンケートを通じた測定と検証. 創造都市研究, 10 (1). 1-12
- 岡村幸代 (2016) 子育て支援に参加した母親の子育て意識の変容—8名の母親の語りから. 家庭教育研究, (21). 37-48
- 小野セレスタ摩耶 (2013a) A市地域子育て支援拠点事業の利用者評価に関する研究—実施場所別の分析結果を中心に. Human welfare, 5 (1). 75-85
- 小野セレスタ摩耶 (2013b) A市地域子育て支援拠点事業の利用者評価—満足度を中心に. 子ども家庭福祉学, (13). 13-24
- 柴田亮・東原文子 (2018) 地域子育て支援拠点事業の利用に際しての不安に関する検討—家庭訪問支援の可能性を視野に入れて. 聖徳大学児童学研究所紀要, (20). 1-9
- 上田よう子 (2018) 地域子育て支援拠点における利用者の心情変容プロセスを支える支援に関する研究—複線径路・等至性モデル分析による支援の検討. 保育学研究, 56 (2). 111-119

**付記**

本研究は、公益財団法人前川財団平成 30 年度家庭・地域社会教育助成による研究である。